

静岡県立大学附属図書館

シリーズ 私の一冊の本

国際関係学部 栗田 和典 先生

ジュール・ヴェルヌ著 ; 高野優訳

『八十日間世界一周』(上・下)

草薙図書館 1F 文庫・新書コーナー 080/Ko14/A49-1・A49-2
光文社(光文社古典新訳文庫)

『八十日間世界一周』はジュール・ヴェルヌ(1828-1905)の 1873 年の作品です。日本語訳が 10 以上の版を数え、舞台演劇や映画やアニメやゲーム、センター試験にまで登場しました。中学入学のころに出会い、世界の広さと人間の多様さに驚嘆し、それから何度も読みかえてきた一冊です。

物語では、精密機械のようなジェントルマン、フィリアス・フォッグが、「どこでも(partout)とおる(passe)」の名をもつ召使い、ジャン・パスパルトゥーとともに世界を一周します。旅のきっかけは、定刻に出かけ、食事をとり、カードゲーム(ホイスト)に熱中して過ごす「改革クラブ」での議論でした。パスパルトゥーがフォッグに雇われたその日の新聞は、ボンベイ(ムンバイ)からカルカッタ(コルカタ)までの鉄道の完成をつたえ、これで世界一周が 80 日でできるとの計算を載せていました。フォッグは現実に可能であると主張し、全財産の半分の 2 万ポンドを賭け金に、残り半分を旅費としてその夜にロンドンを出発します。1870 年代の 2 万ポンドとは熟練職の 10 万日(273 年!)分の賃金です。

しかし、旅は順調にゆきません。フォッグを窃盗犯と疑って逮捕をめざすフィックス刑事がじゃまをしますし、インドの鉄道はじつは未完成です。ヒンドゥーの寡婦殉死の儀礼から若きアウダを救出すべく遠回りもしました。こうした困難をフォッグは旅費をつぎこみ／金にあかせてねじふせ、律儀なパスパルトゥーは主人をささえ、そしてめでたい結末をもたらすことになります。

中学生のころ、この作品は英雄譚でした。ヒンドゥーなどは野蛮な悪者です。大学生になると、今度はオリエンタリズムの描くイメージが気になりました。「目は細く、胸が薄くて……歯を真っ黒に染めている」とはどこの誰でしょう。

いまはときに授業で紹介します。すなわち、この作品の登場した 19 世紀後半の英仏はフォッグとパスパルトゥーのように協調路線をとり、欧米には平和外交や自由貿易で対応します(アジアには敵対的)。1884 年にグリニジをとおり本初子午線が、合衆国の首都ワシントンで開催された国際会議で、フランスの譲歩を得て決定されたのが象徴的でしょう。イギリスのグローバルな展開を経験しながら、ローカルな人びとの姿を垣間見て、さらには世界の構図を知るような作品になっています。